

兵庫・神戸スマートシティ Meetup 「基調講演」

日時	2023年10月31日（火） 13:10~13:50	場所	スペースアルファ三宮 (大会議室)
登壇者	(一社)スマートシティ・インスティテュート専務理事 南雲岳彦氏		

講演記録：スマートシティの潮流と Well-Being について

■自己紹介

- ・ 一般社団法人スマートシティ・インスティテュートの法人会員は700を超えるまでになっている。
- ・ 資料に記載された自治体の伴走、側面支援を行うほか、最近では大学でスマートシティ論などを教えている。



■世界のスマートシティの潮流

- ・ SDGs に示される社会課題のうち、日本が特に遅れている分野として、ジェンダー平等、責任ある消費と生産、地球環境の問題があり、このスマートシティを進めなければならない（ソーシャルインパクトゾーン）。
- ・ ヨーロッパの状況は、大きくいうと3つに収斂される。

脱炭素：1.5度を超える、2度になるのではという危機感が、ドーナツ経済・グリーンストリート、グリーンスポットの背景にある

DX：データの相互運用性とデータ主権の確保

ヒューマンスケール：ウォークラブルで、車に依存しない社会を目指す



- ・ 名称が「スマートシティ」から Climate Neutral and Smart City へと変わってきている。日本においては地域循環共生圏など別のワードで動いているが、いずれスマートシティの取組みと収斂するのではないか。
- ・ コペンハーゲン：ごみ処理場がスキー場の形をしていて、デザイン力でランドマークになっている。「ヘドニスック・サステナビリティ」という考え方、つまり真面目なテーマを真面目にやっていると長続きせず、娯楽性が必要。

- ・ 都市の中の農園：自分が食べることと都市の距離を短くする仕組み、がニューヨークとかパリなどで行われており、この背後にデジタル技術が活用されている。
- ・ バルセロナのスーパーブロック：スーパーブロックの次世代として緑を埋め込んだスペースを増やしている。
- ・ パリ：オリンピックに向けた Walkable City 化。車は便利だが空間ロスや環境負荷が大きい。オランダでは交通事故といえば自動車ではなく自転車というほど、自転車が主流になっている。
- ・ フィンランド Maria01：大病院がイノベートされて中に 107 社のスタートアップが入っていて 0→1 を作る。町の中にスタートアップハブがあり、NOKIA のような一点突破ではなく分散型。国策としてのイノベーションの重要性がスマートシティに組み込まれている事例。
- ・ スマートシティはイノベーターを集めないと持続しない。イノベーターを集めるには都市が Livable で Well-Being 実現可能な場所であってはいけない。そこにはじめて先進的なノウハウを持った人があつまり、テクノロジーが実装される。そのパッケージが Purpose 経営。
- ・ 日本においても Purpose = 人が住んで幸せになる、そのコンセプトがまちづくりの中心にないといけない。

■日本のスマートシティの現状と課題

- ・ 地方創生とスマートシティが別のものからデジ田に収斂。ガイドブック、事例集、リファレンスアーキテクチャなど、ノウハウが出来上がってきており、構想から実装の段階にきている。
- ・ 人材育成については、いま主にふたつ：スマートシティ・インスティテュートの City-Region MAP プログラムと東京大学スマートシティスクールがある。
- ・ 国土交通省「地域生活圏」：ハードインフラ空間とサイバー空間が両立する単位（都市の機能ニーズが似合う規模）として最低 10 万人規模としている。個人的な実務実感としては最低 30 万人、グローバルな比較を踏まえれば、60-80 万人規模。なぜなら、データ連携基盤を自走させようとおもったら、最低 30 万人程度の規模感が必要では、と思うから。
- ・ デジ田は広範な交付金の活用を通じて、自治体のスマート化が点から線、線から面に向かっており、日本もヨーロッパと同水準まで来ている。悩みも同じであり、データ連携基盤、マネタイズ、デジタル人材育成、市民参加。日本のすぐ後ろに ASEAN 諸国、東欧諸国が迫ってきている。
- ・ 内閣府等 4 府省の助成金に基づくスマートシティ展開や、スーパーシティも同様に実装段階に入っている。
- ・ 環境省・脱炭素先行地域：近隣地域に脱炭素化のドミノ効果とデジ田展開の相乗効果が出せれば、ヨーロッパ型と似たような政策効果が実現する。



- ・ 文部科学省・大学を中心としたまちづくり：スマートシティは、先端的であろうとすればするほど、イノベーションを起こせるまちである必要がある。大学そのものがその地域のイノベーションコモンズになれるかどうか、が大きな着眼点。世界に比べて、日本には地域に大学がたくさんあり、アセットもたくさんある。今後は地域への貢献が大学の評価基準になる時代になる。東広島市 Town(タウン) & Gown(ガウン)構想などのように、大学とまちがパートナーとなってまちづくりをしている事例は先駆的だと思う。
- ・ 背景にあるのが「インクルーシブスクエア」という考え方。サイバースペースがあればコミュニケーションを成立するという思い込みがあったが、昔のタバコ休憩室のように、無駄話をするが如く、気楽に専門知識が結合する密接な場をどう作るかがスマートシティの真ん中に来ている。
- ・ スマートシティ推進上の課題、アンケート結果をみると、この3年間で「できたこと」としてリーダーシップ、目的意識、「できてないこと」として、マネタイズ、都市OS、市民参加意識があげられている。
- ・ 人口減少期におけるスマートシティには不可避免的にマネタイズの難しさがある。人口増加期はプロフィットシェア。人口減少期はコストシェア。人口増加国（アジア、中東）で先にスマートシティを実施した利益で、日本のコストをまかなうくらいの戦略が必要ではないか、と個人的に思ったりもする。

■ ウェルビーイングに基づく新たな政策デザイン手法

- ・ GDP だけで豊かさを測ることに限界がきている。次の世代は我々よりも経済的に豊かにはならないとも言われている。次の世代は GDP ではない指標で、明日は今日よりよりよくなることが示せるまちづくりや国づくりが求められる。それがこの P.32 の図の意味である。
- ・ 日本とフィンランドの幸福感の比較をみると、「人生選択の自由」、「多様性」、「政府への信頼」において日本が低い。
- ・ Well-Being というとひとりひとりの心の問題ではないのか、と言われるが、真ん中に自分がいて、それに地域・都市・自然が切り離せないかたちで繋がるタマネギの形と考えるべき。それぞれに主観・客観データが取れるので、現状どうなっているかを見たうえで自分のまちデザインしていく (Well-Being-Based Policy Design)。
- ・ 新たなまちづくりには、まちを作ってから市民の Well-Being を考えるのではなく、予め市民の Well-Being 因子を見つけておいて、それを向上させるように政策をデザインしていくというような、Well-Being by Design の考え方が大切。
- ・ 地域幸福度指標、Well-Being ダッシュボード。インターネットから無料で開放しているので使ってほしい。デジ田 Type2,3 採択自治体は活用が Must になっている。デジ田採択団体以外でも約 100 自治体が利用している。
- ・ 浜松市、会津若松市などがこの指標を活用して、次の総合計画を策定している。
- ・ まちごとに何が幸せに相関するのかがわかってくる。実は、健康寿命そのものだけでは幸福度とは相関がない。両者の間に、いきがいや愛着、感謝や誇りといった因子

があり、こういう因子を高めるような政策を考えることが大切なポイント。

- ・ 浜松、加古川、会津若松、前橋、このあたりが非常に熱心に取り組んでいる。



- ・ まとめとして、

デジタルだけではない形で、スマートシティのすそ野が広がってきている。環境、人間の幸せを深める形で成熟化。

ベンチマーク先はヨーロッパにある。

Big Picture が必要な時代。行政も縦割りではなく総合企画が必要。